

原爆文学研究会報

第六十一号

原爆文学研究会 二〇二〇年一月

中村哲の「笑い」

坂口 博

昨年十二月にアフガニスタンで亡くなった中村哲は、「日露・太平洋戦争と共にヒロシマ・ナガサキ」によって、日本の名前がアフガン奥地までも知られていると、随所で触れている。ロシアに接した国として、ソ連時代を含めたたびたびの侵略に遭ったゆえに、日露戦争の記憶は大きく、また一九四一年からの対米英戦争と広島・長崎の原爆投下による敗戦も、同じく米英主導の戦争が続くため、他人事ではないはずだ。

しかし、ここではそれらは繰り返さず、中村哲の行動を支えた思想の一つ、キリスト教について考えてみたい。ペシャワール会では「無思想・無節操・無駄」の三無主義を唱える中村だが、彼個人としては、強固な思想的裏付けがないことには、イスラム世界のなかで、クリスチャンとして積極的に生きていくことはできない。福岡市の西南学院中学校時代に、バプテストの洗礼を受けたとはいえ、それだけが彼を支えたとは、とても思えないからだ。

本人も言うように、儒教的倫理観も影響を与えたが、キリスト教に関しては、「西田幾多郎という哲学者の後継者である滝沢克己教授という方が九州大学にいて、クリスチャンでした。その先生を通じて、神学者のカール・バルトの著作に触れることがありました。…内村鑑三を通して感じたものをさらに「カール・バルトは」明瞭にしてくれた」という、澤地久枝との対

談（『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る』岩波書店、二〇一〇）での発言を手懸かりに考えてみたい。

スイスの神学者カール・バルト（一八八六―一九六八）や、滝沢克己（一九〇九―八四）の紹介は省く。中村が滝沢を通してバルトを知ったのは、九州大学に入学し、学生YMCA活動に参加した一九六六年のことと推測する。九州地区学Yの「夏期学校」の、この年の主題は「インマヌエル（神われらと共にいます）」、翌年は「イエスと私」と続く。いずれも滝沢が講師として招かれた。次の立場もバルト（そして滝沢）の顕著な影響を受けたものと考ええる。

「私は自分の考えや行動を、笑い飛ばすことができるが、彼ら（一部のキリスト教団体）にはそれが出来ないことである」（『実践のなかにこそ答がある』『辺境で診る 辺境から見る』石風社、二〇〇三）。

滝沢は六七年の夏期学校の座談会で、「バルトと他の神学者を比較して、クレーマーは「バルトは自分の神学を笑うことができる」と言う。ところが普通の宗教家は自分の神学を笑えない。自分の神学や信仰を笑われたら大変だという」（『滝沢克己講演集』創言社、一九九〇）と発言していた。オランダの宗教学者ヘンドリック・クレーマー（一八八八―一九六五）に依拠しているが、滝沢も同意したものであり、中村哲の印象に強く残ったのではないか。「キリスト者として生きるとは、「当たり前の人」として、今をまっとうに生きようとすること」（『実践のなかに：』）も、滝沢克己の「ただの人」との共鳴を見る。

中村哲の言動に見えるユーモアは、この「笑い」が支える。原文研においても、笑い（ユーモア）は大切な要素である。私（たち）は、いつでも、自らの思考や行動を笑えるようでありたいと願う。核兵器も原発も、深刻に糞真面目に論ずるよりは、笑い飛ばすほうが、最も有効な廃絶への道ではなからうか。

第六十一回 原爆文学研究会報告

二〇二〇年八月八日（土）第六十一回研究会を開催しました。新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、本研究会としては初めてのウェブ会議システムを使ったオンライン開催となりました。

今回は中村平さんによる研究発表、そして藤田祐史さん、樫本由貴さん、加島正浩さんの報告と中原豊さんのコメントによるワークショップ「〈震災〉と俳句」が行われました。オンラインでの会を円滑に行うために参加者は会員とその紹介者に限らせていただきましたが、当日の参加者は国内外から約四〇人と盛況でした。

中村平さんによる研究発表「松元寛における政治と文学：広島原爆と大学闘争への向き合い方緒論」では、学生闘争・紛争に広島大学教員として巻き込まれた体験を持つ松元寛が書いた「廣大紛争」小説群から、書かれた当時の状況や運動の中で構築された松元寛の政治について論じられました。

ワークショップ「〈震災〉と俳句」では、まず藤田祐史さんの報告「久保田万太郎と関東大震災」、次に樫本由貴さんの報告「五十年代原爆俳句の射程」、最後に加島正浩さんから「東



日本大震災直後、俳句は何を問題にしたのか―御中虫『閑揺れる』とは何だったのか―」の報告がなされました。

海外や遠方からの参加やしばらく研究会会場に足を運べていなかった会員が参加できたのはオンライン開催ならではでした。また今回も原爆文学研究会らしく質疑の盛り上がる会となりました。新型コロナウイルス感染拡大防止のために決定したオンライン開催でしたが、皆様のご協力のおかげで円滑な進行が叶いました。改めて御礼申し上げます。

◇ 研究発表1

松元寛における政治と文学…

広島原爆と大学闘争への向き合い方緒論

中村 平

「『造反教師』松元寛の『広大紛争』小説群を五十年後に読む」として報告を行いました。当初は「松元寛における政治と文学・広島原爆と大学闘争への向き合い方緒論」というテーマを構想していましたが、学内向けパンフレットなど松元の残したものと関連資料を読み解くうち、①数多くある松元の平和論は別にまとめたい、②「広大紛争」小説群を読み解くにも一定の時間と紙幅が必要、と判断し、冒頭のテーマに絞らせていただきました。

ペーパーと松元の「広大紛争」小説短編一編を事前に配布し、報告では写真を交えたPPTを使用しました。内容としては、①「広大紛争」の概観、②先行研究、③学内向けパンフの主張、④敗戦の廃墟と大学の廃墟の糊塗、⑤「紛争」「教師／教官」の語とポジショナリティ、⑥松元が生まれた植民地朝鮮とジェンダー・家庭観の問題、⑦英語教育・機動隊導入・全共闘の心性との繋がり、⑧加藤典洋「ゆるやかな速度」と政治の問題（栗原貞子との対比）などの軸とテーマから論じました。書かれたものと同時に、状況と運動のなかの松元自身を捉えるという社会―文学的課題を設定しました。総じて、⑥の問題など松元に欠けているものもあるが、松元の小説群は⑤に注意しながら、④と⑦などの大きな問題に真摯に向き合いつつ松元なりの政

治を打ち続けたことを示せたと思います。またその運動のプロセスでは、分裂した主体のような動きと揺れ（動―揺）がそのままに提示されていたことも特徴的です。

質問と討議においては、学生への接し方（秦）、梶山季之や大牟田稔との関係（大牟田）、「造反教師」の大学を越えた横の連帯・岡山大の荻原勝（坂口）、広大教養部闘争・ドゥルーズの政治（柳瀬）、詩人・広島工業大学の大原三八雄の「広島通信」への松元の評価（齋藤）、松元におけるシェイクスピアと平和との関わりについて（齋藤、高野）、全共闘の「解体からの再出発」という考え方はロマン主義的でもあり、松元の「廃墟」の実体性と観念性をいかに腑分けして捉えるか（植松）、松元『ヒロシマの思想』における朝鮮人被爆の問題・全共闘小説概念（川口）、などの有益かつ刺激的な意見が出されました（落としているものがありましたらご寛恕ください）。また史資料を集めつつ分析を深め、これらのご意見に応えられるよう努力したいと思えます。

◇ ワークショップ

「『震災』と俳句」

◇ 報告1

久保田万太郎と関東大震災

藤田 祐史

久保田万太郎（一八八九―一九六三）は俳人、小説家、劇作家として知られている。本発表は、俳句を中心に万太郎の創作全

体における「震災」の意味を明らかにすることを目指した。また、俳句というジャンルは「震災」とどのように関わり得るのか、万太郎の俳句及び関東大震災に関連する俳句を対象に考察を深めた。

久保田万太郎の創作と関東大震災の関係については、千葉正昭「役割としての震災・新派―久保田万太郎『春泥』小解」(『大正文学4』一九九二年十月)のように、個別の作品と「震災」の関係がこれまで論じられてきた。それに対し、本発表では万太郎の創作における「震災」の特徴について、小説においては「震災」後を生きる人々に関心の中心があること、戯曲においては「震災」前の町とそこに生きていた人々を書こうとする意図が見られることを指摘した。また、「震災」以前の家の火事の記憶、後年の空襲体験等が同じ火の記憶として、並列的に語られていることを示した。

万太郎の俳句については、まず比較として河東碧梧桐(一八七三―一九三七)の震災詠を読み解き、細部の描写と韻律の工夫によって眼前の現実を捉える俳句の方法を確認した。その上で、万太郎の俳句はフィクションを導入して「虚」と「実」が不明となる感覚をつくっていることを論じた。また、万太郎に限らず「震災忌」という季語の使い方について、この季語の定着は俳句が「震災」を季として受け容れることであり、災厄に対しての個々の言葉を探求する場としても機能していることを提起した。

質疑応答の時間には、近世における地震を詠んだ句と万太郎の地震の詠み方の類似性や、高浜虚子、芥川龍之介との関係など、比較すべき様々な視点の提示をいただいた。殊にワークシヨップ全体を通し、季語という問題に対して議論の時間が割か

れたことが印象的であった。私自身、論文化に当たっては季語について改めて論じてみたいと考えている。

◇ 報告2

五〇年代原爆俳句の射程

榎本 由貴

本発表では、原爆を表象した俳句のうち、「原爆忌」を用いた句を対象とし、被爆以後の実作者たちの死者への向き合い方や、当時の「原爆忌」の共通認識を探った。これによって一九五〇年代の俳句による原爆表象の射程を捉えることが目的である。研究対象とした一九五五年刊行の句集『広島』(句集広島刊行会編・近藤書店)、『長崎』(句集長崎刊行委員会編・平和教育研究会事務局)は、全国から俳句を公募したアンソロジー形式の句集である。この二冊は、五〇年代の俳句による原爆表象の代表的な成果と言える。

二冊の句集の問題意識には、次のような差異がある。『広島』の目的は、四五年八月の原爆の被害による惨禍を、俳句表現によってとどめることだった。これは作品にも表れ、被爆直後の様子を描いた句が多い。一方、『長崎』は巻末の「後記」で編者の一人である柳原天風子が、時系列に配された部立てのうち、被爆以後の生活を描いた第三部の「戦後の長崎」を最も重要視したと述べるなど、当時の人々が直面する核の問題と、原爆を描いた俳句の接続を問題意識としていた。

発表ではこれらを整理のうえ、二句集の共通点に注目した。それは、「原爆忌」を用いた句に代表される、自分たちの実作

が一九四五年以後、五五年の時点のものだという意識である。「忌」とは本来、死者を弔う意味だが、忌日季語「原爆忌」を用いた句には、その表現に留まらないものがある。それらの句の分析から、実作者たちが死者への弔いに加えて、次の三つの表現を試みたことが分かる。

一つ目に、〈今尚実験この地続きに原爆忌 牛嶋美佐子〉の句のように、当時を生きる彼らが直面する核の問題を示すことである。二つ目に、〈死の灰に魚族ら病めり広島忌 稲垣長人〉などのように、命あるものが再び核兵器による新たな死者となるかもしれない未来への不安や被害の表現である。そして、〈原爆忌罪の枷負う身にめぐる 木下美行〉のように、原爆の死者への責任と、当時の核問題の責任の所在とを自らのものとして捉え返すことだ。

このように「原爆忌」の季語とともに多様な表現が試みられた背景には、五〇年代に盛んだった社会運動がある。被爆への想像力が、第五福竜丸の事件によって促された。そもそも人々の共通概念によって成立する季語のうち、五〇年代の「原爆忌」には、社会運動で共有された人々の問題意識が如実に反映されたと言える。

◇ 報告3

東日本大震災直後、俳句は何を問題にしたか

— 御中虫『関揺れる』とは何だったのか —

加島 正浩

本報告は御中虫『関揺れる』が、被災していない立場から被災者／震災へとつながろうとする詠み方を示していたことを明らかにしようとする試みのものであった。

まず、東日本大震災以後の震災詠では、詠み手の立ち位置が問題にされており、「何を」詠むか以上に、「どこ」を「どこ」で詠むのが重要視されていることを指摘した。そして各々の置かれた立場を引き受け、詠み手の位置を適切に定めることで詠むことができる俳句がある（「被災者」でなくても／でないからこそ詠むことができる俳句がある）という言説があることを確認した。しかし実際には詠み手が「被災者」であるのか、「どの程度の被害を受けた」人物なのかという「情報」が、句の読解・評価に影響を与えているということを、長谷川權『震災句集』と、福島県須賀川市在住の俳人永瀬十悟の「ふくしま」五十句を比較することで明らかにした。

そのうえで、詠んだ句のみならず、どの程度の被災を受けた人物が詠んでいるのかも含み句への評価が下される状況で、被災していないものが被災の影響を受けていない（とみなされている）場所でののように「震災」を詠みえたのかを明らかにするために、御中虫『関揺れる』の分析を行った。まず、季節のサイクルの外側から到来した「震災」を詠むにあたり、生命力溢れる循環する世界を前提にする季語を用いては震災を詠みづらいため、無季で詠む試みが高野ムツオ、照井翠らによってなされていることに触れ、御中虫の『関揺れる』も「関揺れる」という疑似季語を用いることで、震災以前に俳句の世界を成立させていた伝統的な型式にはめることができないものとして震災を捉えた俳人の流れにあることを確認した。そして「日常」の生活を送るなかでも、被災した知人の『日常』が、私の「日常」に影響を与え、震災後に変化した様子を詠むという「震災」

詠のあり方が『関揺れる』において試みられていたことを明らかにした。

彙報

第六十一回 原爆文学研究会

○日時 二〇二〇年八月八日(土)

○会場 ウェブ会議システムを利用したオンライン開催

○研究発表

松元寛における政治と文学：広島原爆と大学闘争への向き合い
方緒論
中村 平

○ワークショップ・「〈震災〉と俳句」

報告1 久保田万太郎と関東大震災

藤田 祐史

報告2 五十年代原爆俳句の射程

樫本 由貴

報告3 東日本大震災直後、俳句は何を問題にしたか

―御中虫『関揺れる』とは何だったのか―
加島 正浩
コメント
中原 豊

編集後記

今号の会報編集を担当しました、堀本と申します。二〇二一年、原爆文学研究会が福島でフィールドワークを行った年、大学院生の頃よりお世話になっております。専門領域は近現代文学、特に戦後国語教科書における「原爆文学」の掲載変遷や指

導方法に興味をもって取り組んできました。現在は東京都内の公立中学校に勤務しています。日々教え伝えることの課題に直面している者として、第六十一回研究会では研究発表やワークショップでの報告、質疑から学ぶ点が多くありました。

さて、第六十二回原爆文学研究会は、十二月十九日(土)にオンラインにて開催予定です。福岡市で開催することを目指していましたが、十二月の新型コロナウイルスをめぐむる状況が見通せないため世話人会で話し合っ、第六十一回研究会同様にウェブ会議システムを使うことになりました。

最後になりましたが研究会での報告内容をお寄せいただいた報告者のみなさん、巻頭エッセイの執筆を快諾してくださった坂口博さんに心よりお礼を申し上げます。(堀本 嘉子)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四-〇一八〇 福岡市城南区七隈八一九-一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>